中国における〃医は仁術〃の思想と史的変遷

山本徳子

〃医は仁術〃なる語句の初見は、明代に出版された『医説』（宋、張杲の著。一五四四）に付せられた康馮彬の序文にみられ、その倫理的なことについての記述は、徐春甫の「医本仁術」（『古今医統大全』。一五五六）にあることは周知の通りである。しかし、この徐春甫の「医本仁術」の記述は、陸宣公の論に拠るものであることを注に記している。

なお、明代においては、これらのほかに、黄堬・程敏政等のものにも、〃医は仁術〃ということがみられる。ことに、程敏政は、その文中において、古くは医は仁術と称した、ということを述べている。彼のいう〃古〃とは、いずれの頃を指すのかは明らかではないが、ともかく、明代より以前の時代だということである。そうすると、前掲の「陸宣公の論」ということからも考えられるのは、唐代も一つの範囲内となろう。

ところで、これら〃医は仁術〃なる語句を称した人たちの身分および出身をみると、純粋の医者に限定されていないことに気づく。

すなわち、康馮彬は行政官・官僚である。徐春甫は、代代儒学を業とする家の出身で、自身も儒家であったが、のち医薬のことに携わっている。陸宣公（陸贄）は唐代の著名な政治家（宰相）・官僚である。黄堬は儒家の出身であるが、のち医官になっている。そして、程敏政は名臣の子であり、文官・官僚である。

こういったことから知られることは、〃医は仁術〃を称し、かつ、記述していたものは、儒学（経学）の素養の深い人たちであった、ということである。そして、これらのことを参考として、さらに考えられることは、中国において〃医は仁術〃を称していたのは、儒学すなわち経学に基づくところの医学思想によるものであったのではなかろうかということである。その一つの証明となるのは、本邦においては、〃医は仁術〃とは、医の倫理の表現とみられていると同時に諺としても広く知られていることである。こ

れに反して、中国では諺の中に〝医は仁術〟というものは存していない。ここに、その解釈の相違および重要性の大きな違いが存しているものと解される。

中国において、なぜ、医者以外のもの、とりわけ、官僚・文化人たちが、〝医は仁術〟を称したのであろうか。さらに、古くから存していたものの、なぜ、明代において盛んに称されるようになったのであろうか。

その理由として考えられるのは、明代に至るまでの時代的変遷のことである。すなわち、唐・宋間の大きな変革期を経た政治・社会の変化、そして、経学・文化等の変化である。それに伴っての儒家・文化人たちおよび医者の身分の変遷のあったことである。

（横浜市立大学医史学研究室）

素問霊枢に於ける気の研究

家本誠一

素問霊枢の医学は、三才・陰陽・五行をもってその理論的枠組となし、気をもってその医学的内容を展開している。気とは一つの機能的エネルギー的概念である。この点、現代医学がより多く形態的物質的基礎の上に構築されているのに対して一つの特色をなしている。故に中国古代医学は気の医学と呼ぶにふさわしい。

中国古代における気の本義、気の概念の発生と展開の探究については、先人の業績がある。その検討はしばらくおいて、ここには素問霊枢の医学における気の意義について考える。

生体の構成。これは三つのレベルに分けてみることができる。一つは魂魄。語源によれば、人が死ぬと魂は肉体から抜け出て飛昇し、あとにぬけがらとしての肉体の形が残る。これが魄である。逆算して生体は魂魄より成る。素問